関西自然保護機構会報（17）59－60，1989

# シンポジウムへの感想

立　沢　史　郎（大阪教育大学）

はじめに持ち上げておこう。ニホンジカ（以下シカ）とそれが生息する地域の植物に関する現役の研究者が揃って議論をおこなったという点で，シカにとっても植物にとってもこれは研究上価値あることだ。それは誰もがわかっている。（学会関係以外では関西では初めてではなかろうか）

ここで，そのこと以上に私が評価したいのは，在野でシカを含めた自然環境の保全活動に携わっているいわば市民リーダー（以下リーダー）が，研究者以上に顔を揃えていたことだ。開会時には何が起こるのかといった緊張感さえ漂っていた。この理由は残念ながらＫＯＮＣの名が一般に浸透してきたからではなく，「シカと人と植動」というテーマ（ネーミング？）にあったのだろう。けれども多くのリーダーと研究者が一か所に集まっただけでもたいしたものである。

関西でも各地で「シカ」と「人」と「植物」のからみ合った問題が出現し，環境保全運動にも大きな課題（お荷物）となってきている。しかしシカや植物各々に関する議論はあっても，相互関係と両者の保護・保全に正面から取り組む議論や場は，少なくとも関西では，研究室の外では皆無であったろう。研究者だけでなく現場の運動家にとっても，必要な時に必要な場が設けられたのである。会場からの，「人間による環境変化がシカに及ぼす影響を知りたい」，「シカを守るためにどのような環境をどれくらい残せばいいのか知りたい」といった意味の発言に，今回のシンポジウムへの市民側の大きな期待と多少の失意が集約されている。

議論，特に総合（？）討論の内容に「人」があまり入っていなかったことは仕方が無い。ほとんど研究が進んでいない，というより日本では手着かずなのだから。研究者以外の傍聴者からは，「議論をわざと避けた」と取られても仕方のない状況ではあったが，むしろ川道氏や小泉氏が時に研究テーマを超えて「人間側の管理」に言及したことを大きく評価しなくてはならないだろう。

さて，今回は（特にシカに関わっている）リーダー同士，また研究者とリーダーの間で，コミュニケーションの絶好の機会であった。が，今年も，残念ながらどちらともが，その努力をあまり払っていなかったようだ。既に顔なじみだから？　顔なじみでも議論したことの無い人は多くいよう。両者の交流をもっと促すような企画側の意図がそろそろ出てきても誰も怒らないだろう。例えば，観察会をシンポジウムの後に持ってくるのも手かも知れない。

結局，現在の限界と今後の可能性を同時に見た思いであった。即ち，研究者による研究・提言機関であるＫＯＮＣが，現場での問題に正面から取り組んでいる人たちを取り込んでゆけるかどうか。その意図がどれくらいあるか。運動する側に対して「もっと勉強しろ」と言うのはたやすいが，議論の材料を準備するのはやはり研究者であり，（使い古された言葉だが）それが研究者の責任だろう。ここで，「研究者」と「リーダー」という具合いに変なカテゴライズをしてしまったが，現実にそうなって（別れて）いると思う。それが日本の自然保護に関する機構の実状なのである。求める材料があれば，立場にこだわりなく，勉強をしに，市民は来るはずである。会員外の参加者が多いことがそれを示していないだろうか。ＫＯＮＣくらい，研究者側がもっとエスコートしてよいと思うのである。

限界と言えば，行政関係者の姿が年々見えなくなってきているように思うのは思い過ごしだろ

うか。

次に，議論の内容について二点疑問がある。

一つは，「環境悪化」という言葉についてである。シカの摂食による植生改変がそう表現される場面が何度かあった。この表現はあくまで「植生の遷移段階からみれば」という但し書きの価値判断だと私は解釈してるが，どうなのだろうか。もしそうだとしても，「悪化」の意味や基準が説明されぬままこの語が多用されると，知らずにシカ駆除を促す結果になるであろうことを私は危惧している。林業地の植栽木の摂食（食害）においてシカ・カモシカ＝環境破壊者（＝駆除すべき対象）というイメージを形成するために意図的に用いられた前例があるからである。

二つ目は，環境収容力（Carring Capacity，以下ＣＣ）とクラッシュ（Clush）への疑問である。大台ヶ原の植生変化を中心に話が進み，それに続いてシカの特性としてのクラッシュが話題となって，あたかも大台ヶ原で将来クラッシュが起こる（ほど個体数が増加し植生が破壊される）ようにとれる発言がいくつかあった。

シカが捕食者のいない地域である程度以上増加すると摂食量が植物の生長量を上回り，結果，ＣＣが低下してその個体群は貧栄養状態になる。このときに天候不順（豪雪）等があると，短期間に大量死（クラッシュ）が起こる。そこで，どうせ死ぬのなら植生を破壊する迄に老齢個体を中心に間引いて，再生産力の高い高質個体群を維持しよう，その方が環境変化にも対処でき，数の回復も速いだろう，という管理法が発想される。これは確かに理にかなった管理法の一つではある。

しかしクラッシュが報告されているのはいづれも島嶼条件である。本来環境が周辺地域と連続している大台ヶ原（をはじめ関西の主なシカ生息地）でクラッシュが起こるといえる根拠はなく，クラッシュを想定した（ような）議論は先の間引きによる管理法に直結する可能性があり，注意が必要ではなかろうか。個体数が増加すれば季節移動などをきっかけに周囲へ分散したりして，致命的なまでに植生を変化（＝ＣＣを低下）させたりその結果クラッシュを起こしたりしない，という期待（幻想？）を持ってもよいように思えるのである。

また逆に，開発等によって周辺地域から生息地が隔離され，それ故クラッシュが予測されるということになった場合，その時は一体何を管理すべきなのだろうか？　シカの間引き，もしくは貴重な植生の破壊を我慢すればそれで済む問題なのだろうか？

ちなみに大台ヶ原でシカの駆除が行われる可能性は低いし，あるべきでないと私は考える。前に述べた「人慣れ状態」が失われてしまうからである。それは，「ふれあい構想」が進められているから，という理由でなく，今のシカの状態が，まさしく大台ヶ原を訪れる人とシカ，そして両者の存在を許す自然環境の三者間で時間をかけて培われた文化にほかならないと考えるからである。

なお，蛇足だが，大阪のシカの状況をぜひ見ていただきたいと思う。関西の大部分のシカの生息状況を象徴し，また将来を予見させるのは，大台ヶ原でも奈良公園でもなく，住宅地とゴルフ場の間に少数ごとに隔離され，排ガスを吸って生きている大阪のシカなのである。

以上，ＫＯＮＣが「生態学」機構でなく，「自然保護」機構として関西で大きな役割を果たしてゆくことを願って雑感を述べさせていただいた。思い違いをしている部分が少なからずあろうが，その点指摘していただければ幸いである。おわりに，シカをめぐる様々な問題，特に大台ヶ原の管理について考える機会を与えてくださったＫＯＮＣ事務局とシンポジウムに先だって行なわれた観察会参加者の皆様に感謝いたします。